

## バイオアートにおける「遂行性」と「環境」の再考——マイクロパフォーマティヴィティと「圏」をめぐる芸術学的検討

長谷川紫穂 (慶應義塾ミュージアム・コモンズ)

バイオアート、すなわち生物や生命科学と結びついた芸術実践は、遺伝子組換え・ゲノム解析・合成組織培養といった生命科学技術と結びつく表現から、微生物叢や生態系という生命の総体的存在を含んだ広く非人間的主体 (non-human agency) との関係問い直す作品に至るまで、過去40年ほどの間に同時代の技術や社会的問題意識と接続しながら展開してきた。特に「バイオメディア (bio-media)」を何らかの形で介在させる芸術実践では、人間による文化的営みの産物である作品内に非人間的主体(あるいは存在)が関与することで、偶発性や予測不能性が作品の一要素となり、バイオアートの動的かつ活性的な性質を特徴づけている。

このようなバイオアートの性質に対し、理論家でありキュレーターのイェンス・ハウザー (Jens Hauser, 1969-) は「マイクロパフォーマティヴィティ (microperformativity)」という概念を提唱してきた (2014/2020)。彼は1990年代以降のバイオメディアを用いた芸術実践を分析し、特に微生物や細菌などの微視的存在の仲介性や、DNA配列やフェロモンといった生命活動に関わる不可視の化学的・物理的作用に着目した。こうしたミクロな存在による遂行性は、最終的に巨視的スケールでの変容や予測不能な現象を引き起こすが、その連関はしばし知覚されず不可解さとして現れる。ハウザーはまた、このミクロな遂行性が人間と非人間における「共身体性 (co-corporeality)」を生成する可能性を論じ、ポストヒューマン的芸術の成立条件を考える上での理論的基盤を提供してきた。

本研究はハウザーのマイクロパフォーマティヴィティ論を起点に、特にバイオメディアを用いた芸術実践における遂行性がいかなる「場=環境」において実践されうるのかを考察する。バイオメディアの活性状態を維持しうる「環境」の問題は(それが作品主題上の前景/後景であるかに関わらず)常に存在していると言える。一方で、単なる生存条件 (habitat) としてのみならず、作品内の他構成要素との関係を結ぶ相互作用の場 (milieu)、あるいは各生物に固有の意味生成的世界 (Umwelt (環世界)) といった、異なる次元の環境概念と複層的に結びついている。

本発表では、こうした環境の複層性を記述・把握する枠組みとして「圏 (-sphere)」という仮説的概念を提示する。これは水圏・大気圏・生物圏といった地球科学的環境の構成区分を示すことに加え、ペーター・スロターダイク (Peter Sloterdijk, 1947-) が論じるような展示空間や鑑賞体験の場を球体的空間 (Sphären) とする議論とも接続し、バイオアートを知覚的・物質的・制度的諸条件が交差する領域として捉え直すための理論的補助線となる可能性を検討するものである。